

報告Ⅰ 「令和6年における山岳遭難の概況等」	
質問	回答
「3. 目的別」の項目において「スキー登山」と「スキー」が分かれてデータが整理されています。 この区別の定義をお教えいただければ幸いです。	警察庁では、「スキー登山」とは、「スキー場管理地以外の山岳において、スキー（スノーボードを含む。以下同じ。）を目的に、スキーにより（装着に限らず携行する状態も含む。）登山することを目的とする行為」とし、「スキー」とは、「スキー場管理地以外の山岳において、スキーを目的として、登山行為を伴わず、スキーにより滑降する行為」とし、集計しております。
山岳遭難概況の発生件数ですが、コロナ発生の令和2年以降増加しておりましたが、令和6年度に減少している理由として考えられることを教えてください。	山岳遭難の減少については、様々な要因があり、一概に言うことはできませんが、令和6年は、主な目的となる登山における山岳遭難件数が減少していることなどが要因と考えられます。
男女別の統計は公表されないのでしょうか。死亡事故の態様別を公表していただきたいです。	発表の在り方についての今後の参考とさせていただきます。
遭難者数の分母にあたる年代別登山者数のデータは有りますか。 50歳以上の可処分所得が高い世代がより多く登山を行っている傾向があるという分析はあるでしょうか。 遭難の様態に関して 滑落の初期発生原因が躓きやスリップ、転倒から、滑落に至るケースも多いかと思います。 疲労は肉体脳機能の低下に繋がり、道迷い、転倒、滑落に至る重大なポイントかと考えています。 様々な遭難様態の初期原因となる”疲労”にフォーカスした警告を是非お願いします。	警察庁では登山者数に関する統計は保有しておりませんので、ご質問いただいた分析については実施しておりません。 山岳遭難の発生状況を踏まえ、引き続き関係機関と連携した広報啓発に努めてまいります。
高校登山の顧問でございます。現在冬山登山は禁止、ですが個人的には冬山こそ登山の醍醐味とすることがあります。無雪期にはない冬山専用の登山用具の使い方・登山技術は確かに私でも難しく、専門性が求められます。しかし、少しでもその技術でもって、冬山・雪山の自然、醍醐味を味わい、生徒の心身の発達につなげていければと思っています。また、山岳遭難や凍傷・低体温症等々のリスクマネジメントを指導しながらステップアップさせていければとも思います。 これまで、冬山での高校登山の遭難事故や件数、事前予防策があれば、それを今後の夏山登山に活かしたいと思えます。	高校生の部活動としての登山行為に関する集計は実施しておりませんので、ご質問いただいた高校登山の遭難事故件数については把握しておりません。
山岳遭難者の年齢層別構成比で、各年齢層の人口比遭難率のような資料はあるのでしょうか。 40代以上が約80%を占めるのはわかりますが、人口が多いのでそのような数字になるのか、年齢が高い方が登山という活動をする割合が高いのか見てみたいと思いました。	警察庁ではご質問いただいた資料については保有しておりません。
通信手段の使用状況の推移につきまして 携帯電話はほとんどの方が所持しているにも関わらず、令和6年度の集計では使用なしが27.2%と増えている理由を教えてください。	様々な要因が考えられ、一概に言うことはできませんが、令和6年は令和5年と比較すると、「山菜・茸採り」を目的とする遭難者が、「通信手段の使用なし」である件数が増加しております。

報告Ⅱ 「事例から学ぶ活動能力向上手法」	
質問	回答
訓練方法についてご確認したい点が一点あるのですが、AIを用いた机上訓練について、どのようなアプリを活用しているのかを参考までに情報提供いただければと思います。	様々なアプリがあるかと思いますが、講演内で用いたものはChatGPTを活用したものです。
山岳救助の事例、拝見させていただきましたが、貴組合では全職員が消防活動と並行して山岳救助の訓練や座学・机上学習等を定期的に行っておりますでしょうか。また、気象学や救急医療の実技練習等も行っておりますでしょうか。高校生向けに何かアドバイスがあれば参考にしたいと思います。	ほぼ全職員が各種訓練を実施しておりますが、一步踏み込んだ山岳訓練は山岳救助隊及びそれを目指す隊員で実施しているのが現状です。また、気象に関する知識については、一般市民と大差ないかもしれませんが、救急隊員としての資格は全職員が有していますので、山岳事故時のみならず当消防本部の強みの一つともなっています。高校生向けのアドバイスとはならないかもしれませんが、最寄りの消防本部で外傷措置や搬送法に特化した救急講習も実施していますのでお問い合わせください。
神奈川県では山岳事故の救助捜索については警察が中心に動きます。青森県では山岳救助隊は消防中心なのでしょうか。	山岳救助事故として119通報が入れば消防機関が先行して出動しますが、現地で警察機関を始めとする関係機関と合流して救助活動にあたります。一方、遭難事故として110通報が入れば、遭難事故として地元の山岳遭難対策協議会が中心となって活動します。消防機関も協議会の一員ですので、山岳救助事故同様に事故現場では関係機関が連携して活動にあたります。